儀仗兵への道

For honor

June 6, 2016

Original text by Staff Sgt. Michael Washburn
374th Airlift Wing Public Affairs

短くても一年。それは、空兵が儀仗隊に志願し、サインする時に交わす約束だ。一年を掛けて基地を代表する儀仗兵となり、高官や特別来賓が訪れる際や退役式、軍葬などで儀仗を行う。任務は一年、もしくはそれ以降も務める隊員もいる。

空軍の儀仗隊の歴史は長い。その歴史は、米空軍司令部が1948年にエリートの隊員を集めて式典部隊を創設したことに遡る。このたび、横田基地の5人の空兵が、新たにそのエリートの道を歩み始めた。

まずは、空軍入隊時に基礎訓練で学んだ動きとは異なる儀仗兵の立ち振る舞いを一から全て学び直すことから始まる。号令は同じだが、動作は異なる。訓練課程に通常3ヶ月を要する。それだけの期間の訓練を要するため、儀仗隊に入隊した空兵たちは一年間以上、従事することを約束する。

儀仗隊監督官ジョシュア・ロッキー大尉は「儀仗隊の編成は基地によって異なる。他の基地では、1年のうち1ヶ月従事しては1ヶ月休むことを繰り返したり、6ヶ月連続で儀仗兵としてのみ専念するところもある。横田基地では、儀仗が不定期で編成され、本来の任務と平行しながら従事するので、一年という期間の約束が交わされている」と述べた。

儀仗隊の物品管理官および指導補佐官のマイケル・ナタレロ上級空兵にとって、初めは儀仗の動作に慣れない訓練生がプロの儀仗兵に育っていく姿が楽しみだと言う。「入隊したばかりで何も分からない空兵たちが、一つ一つの動作において威風堂々とした儀仗兵となり、やがて彼らが儀仗隊を率いていく立場になっていく姿を目にすることにやりがいを感じる」と語る。

ナタレロ上級空兵によると、指導官たちは常に儀仗兵たちに「基地の顔である」と語ると言う。その言葉はまさしく真実だ。下士官学校の卒業式、指揮権交代式、退役式、軍葬、地域の行事などの公式行事において、式典に先立つのは儀仗であり、集まった全ての人々の注目を集める。全てにおいて完璧であることが求められる。

レベルの高いプロ集団の儀仗隊に憧れて入隊した、一人の訓練兵がいる。

マリッサ・アンティロン・ロヤ一等空兵は「儀仗兵は常に私の中で最高レベルにあり憧れる存在だった。空軍に入隊する前に予備役将校訓練課程を経て、ドリルや式典チームを務めた。その後、旗衛隊を経験し、最終的にトップレベルの儀仗兵になる道へと辿りついた。その頂点に達し、空兵として自らを高める機会を得られたことを誇りに思う」と述べた。

5人の新しい訓練兵は、やがて“訓練兵”という名を卒業し、一人前の儀仗兵として任務を遂行していく。厳しい訓練を乗り越えた末、式典等の場で儀仗を務められるようになる。そして彼らの後には、また新たな訓練兵が入隊し、一年またそれ以上に渡って米空軍の長い伝統を引き継いでいく。

旗の訓練のため整列する訓練兵たち。儀仗兵として任務に就くには、整列、ライフル銃、国旗等の評価テストに合格しなくてはならない

星条旗を畳む訓練

歩行時の音でチームの合図をとるため、靴のかかとに蹄鉄を取り付ける